

◆西方官衙南地区的調査—第82次

1 はじめに

調査地は藤原宮西南隅に位置し、藤原宮西方官衙南地区にあたる。道路造成にともなう事前調査として実施したもので、調査面積は1,800m²である。

本調査区周辺では、1972年以降、多くの調査がおこなわれている。その結果、調査区の北には、先行条坊側溝を埋め立ててつくられた平城宮馬寮と類似する官衙（第

5～9次調査『藤原報告II』)を発見したのをはじめ、東には掘立柱塀で区画された2つの区画(第76・79・80次調査)がみつかるなどの成果を得ている。

このほかに藤原宮の下層一帯に広がる弥生・古墳時代の四分遺跡の様相も断片的ながら判明してきている。

これらの調査によって、今回の調査区には、藤原宮の官衙のほか、藤原宮直前期では、宮内先行条坊として西二坊坊間路と五条大路などの遺構の存在が予想されると

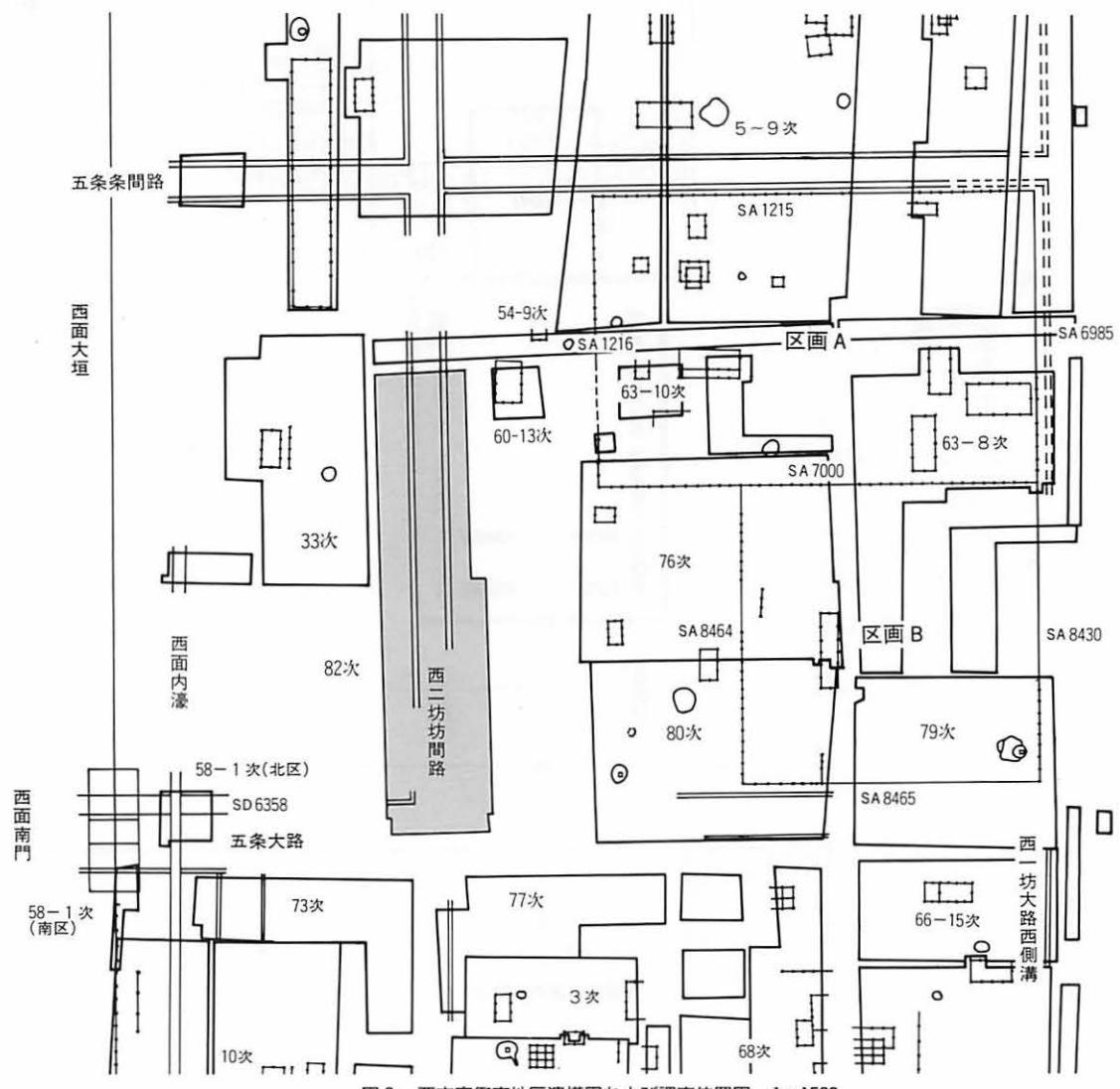


図2 西方官衙南地区遺構図および調査位置図 1:1500

とともに四分遺跡の様相など、弥生時代から藤原宮期にかけての長期にわたる土地利用、空間利用にかんする成果が期待された。

2 基本層序

調査地の基本的な土層は、上から水田耕土、床土、灰褐色土で、その下は、場所によって異なる。調査区南半では、灰褐色土は比較的薄く、その下は、南端で、弥生時代の包含層である黒灰色粘土が露出している場所があるほかは、大部分が黄褐色細砂または、こげ茶色の粗砂層が広がる。調査区中ほどから北よりにかけては、床土と古墳時代の包含層（炭混じり暗褐色砂質土、灰色粘質土）とのあいだに、灰褐色土が分厚く堆積する。

遺構の検出は、中世以降の細溝群を、灰褐色土において、藤原宮期および藤原宮直前期、古墳時代斜行溝などは、灰褐色土下の茶褐色砂質土または、包含層上面において行った。古墳時代水田は、黄褐色砂層下で検出した。

3 検出遺構

検出した遺構は、時期別にみると、(1) 古墳時代 (2) 藤原宮直前期から藤原宮期 (3) 藤原宮期以降中世以前 (4) 中世以降、に大別される。

中世以降の遺構は、東西、南北方向からなる多数の細溝群であり、記述を省略する。

藤原宮直前期から藤原宮期の遺構

宮内の先行条坊にぞくする西二坊坊間路、五条大路とその側溝、土坑がある。

西二坊坊間路SF3205 すでに北方の調査区（第54-9次）で検出されており、今回検出分は、その南延長部にあたる。東西両側に側溝をそなえ、道路の規模は路面幅で約5.4~6.5m、側溝心心間で約6.2~6.8mである。調査区の北から約56m分までは、両側溝を検出し、以南は、西側溝がさらに約12m分かろうじて残っていた。五条大路との交点付近までの間約18mは、両側溝とも削平のため遺存していない。

西二坊坊間路東側溝SD3206 幅が約1m、深さは調査区北端で約1.2mと最も深く、南へいくにしたがって浅くなる。調査区中ほどでは、底部を浅く残すのみとなる。溝内の土層は、上半部が青灰色ないし灰褐色砂質土で、堅くしまっており、溝の埋め立て土と推定する。下半部

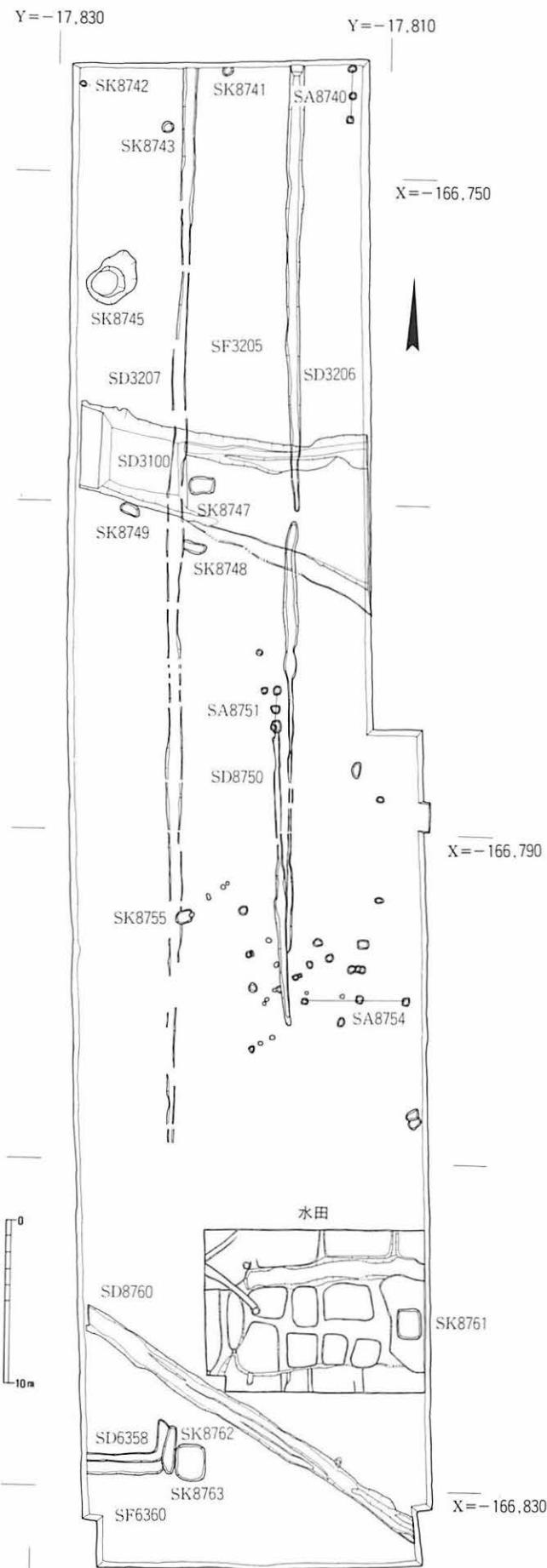


図3 第82次調査遺構図 1:400

は、細砂混じりの青灰色ないし暗灰色粘質土で、流水時の堆積である。青灰色ないし灰褐色砂質土は、調査区北端から約20mほどまでは認められるが、以南は、細砂混じり青灰色粘質土のみとなる。調査区北端に近い位置の溝底に近い暗灰色粘質土から藤原宮直前期に属する土師器、須恵器とともに「評」の文字を含む木簡が出土した。

交差点における西側溝SD3207は、交差点から北に3m分だけ存在し、幅約1m、深さ約0.2mである。溝の東が土坑SK8762で破壊されているので、本来の幅はもう少し広かったであろう。

西二坊坊間路西側溝SD3207 幅0.8~1.0m、深さは、北端で現存0.3mほどで、南へ行くにしたがって浅くなる。東側溝にくらべて浅い。溝内は青灰色砂質土が堆積する。その上の溝埋土である灰褐色砂質土は北端から10mほどまでは薄く認められるが、以南では青灰色砂質土のみである。少量の土器が出土した。

西二坊坊間路は、調査区南端で五条大路SF6360と交差する。交差点北西で、西二坊坊間路西側溝と五条大路北側溝が逆L字形に連接する。これに対応する北東位置では、側溝はまったく残っていない。

五条大路SF6360は、今回の調査区内では、北側溝を調査区西端から約5m分を検出したが、南側溝は、調査区外になるため、この位置での道路幅を確認することはできなかった。なお、五条大路の幅については、東の調査区（第80次）では、溝心心間で約8.5m、路面幅で約7.5mという値が知られている（『藤原概報26』）。

五条大路北側溝SD6358は、幅1.2m、深さ約0.2m。南半部が深い。

なお、宮内の五条大路に関しては、東の既調査区（第80次調査）では、藤原宮期に側溝の掘りなおしがあり、宮内道路として踏襲されたことが指摘されている（『藤原概報26』）。

土坑SK8745は、南北約3.4m・東西2.3mの不整形で、深さ約1mある。埋土は、2層にわかれ下層は、暗灰色粘土、上層は青灰色砂質土である。一気に埋め戻された様相を呈する。

藤原宮期以降中世以前の遺構

藤原宮期以降中世以前の遺構としては、堀2と、南北溝1、土坑4がある。

南北溝SD8750は、東側溝SD3206に重複して、それより



図4 西二坊坊間路・五条大路交差点（西北隅 東から）

新しい溝である。全長18.5m、幅40cm前後で、深さ5~10cmある。溝の方位は、北で西に振れる。

南北堀SA8740は、調査区東北隅で検出した。南北2間で、柱間は北から約1.6m、約1.4mである。北接する第54-9次調査区にはのびない。SA8740は、坊間路との前後関係は決めがたい。ただ、方位がほぼ方眼方位にのっていることや、東約6mに検出されている掘立柱建物（4間×3間の南北棟）（第60-13次調査）と中心を揃えることから、それとの関係が考えられるが、決め手を欠く。

南北堀SA8751は柱間2間で、南北溝SD8750を切って柱穴が掘られており、柱間は北が約1m、南が約1.2m。

東西堀SA8754は、東西2間、柱間は、東から約2.7m、約3.3mである。

土坑SK8741は、一辺約0.6mの不整形、深さ0.15mの小土坑である。土坑内には平瓦1枚分を3枚に割って重ねてあった。北に接する既調査区（第54-9次調査区）には関連する遺構は存在せず、この1箇所だけの単独の存在であり性格は明らかにしがたい。

次に記す3箇所の土坑は、調査区南よりにある。

土坑SK8761は、東西1.4m、南北1.8mの長方形、深さ0.5mである。土坑SK8762は、東西1m、南北3.6mの長方形、深さ0.2mである。土坑SK8763は、東西1.7m、南北2.3mの長方形、深さ0.4mである。

これらの遺構は、先行条坊路面上に位置すること（SK8763）、側溝が埋められた後に、もうけられていること（SK8762）、また縄叩きの平瓦をふくむ（SK8741、SK8761、SK8763）ことなどから、年代は藤原宮以降に属する。土坑SK8762も土坑SK8763と同質の埋土であり、同



図5 水田（東から）

時期と推定される。

古墳時代の遺構

水田と斜行溝2がある。

水田 東西13m、南北10mの範囲を掘りさげて検出した。水田は、黒灰色粘質土（弥生時代包含層）をベースにつくられており、計12枚を検出した。

まとまって検出されたのは本調査区の南辺に露出した包含層を南辺として、その西と北の大畦（幅約1m）で区画された東西に長い長方形の大区画（南北約5m、東西11m以上）のなかに形成された水田である。低い小畦（幅0.3~1.0m、高さ15cm前後）で区画された水田8枚を検出した。東端の1枚をのぞく7枚は全形がわかり、いずれも方形または、不整方形である。大きさは、大中小3種類あり、小型は一辺1.5~2.5mで5枚、中型は3×2mで2枚ある。東の1枚は一辺6mで、これらより大型である。西の大畦の北端と南よりに2箇所の開口部がある。

調査区内には、このほか大畦の北にも一辺7~8mの水田が3枚ある。西北の斜行する2条の溝は、重複関係から見て水田よりは新しいものである。

水田面は黄色の微細な砂層でおおわれていた。水田の深さは、小畦からの深さが、現状で約3~7cmある。水田中からは土器細片が少量出土している。大半がベースの包含層から遊離した弥生土器の細片であるが、1片の古墳時代の布留式の土師器小片があり、水田の時期がその頃である可能性を示している。

斜行溝SD3100 調査区中ほどで検出した南東から西北へ流れる大規模な自然流路である。既に、西隣の第33次調査区や、東方の第76次や、第80次の調査で、存在が知

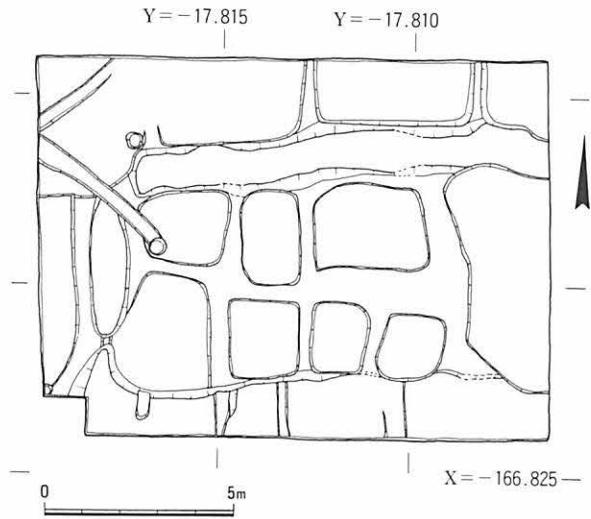


図6 水田遺構図 1:200

られていたもので、本調査区では、長さ18m分を検出した。本調査区内での溝幅は4m前後で、オーバーフローを含めると、最大幅は、西端で約5m、東端で約9mとなる。両岸は比較的急な傾斜をもつ。溝の深さは、調査区西端において溝肩から約2mまでは確認したが、崩壊の危険により、溝底は未確認である。調査区西端の南岸裾に近い位置に掘立柱穴1箇所を検出した。掘形は、一辺約0.8mで、柱根（直径20cm、長さは現状で0.6m）を残す。検出位置からみて橋脚かとおもわれるが、対する北岸には掘形や、柱根は認められない。

溝の堆積層は、基本的に砂層であって、上から第1~3層に大別される。第3層は、分厚い砂礫層で、磨滅したごく少量の土器片の他は、ほとんど遺物をふくまず、強い流れがあったことを示している。第2層は、粘質土まいりの青灰色の細砂層であり、流れがゆるいか、または

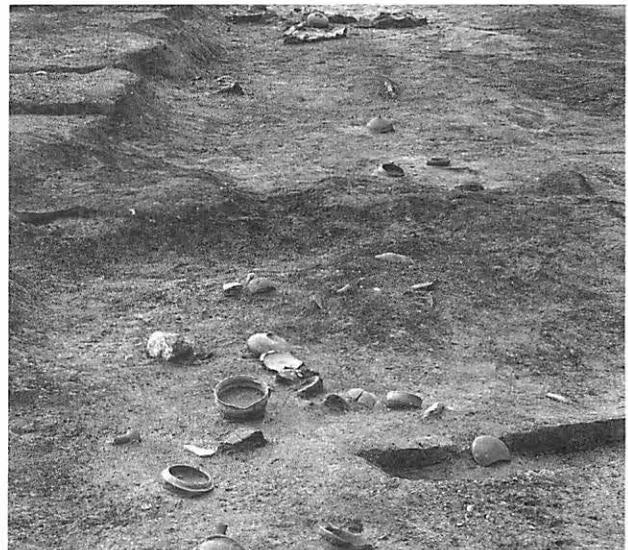


図7 斜行溝SD3100土器出土状態（東から）

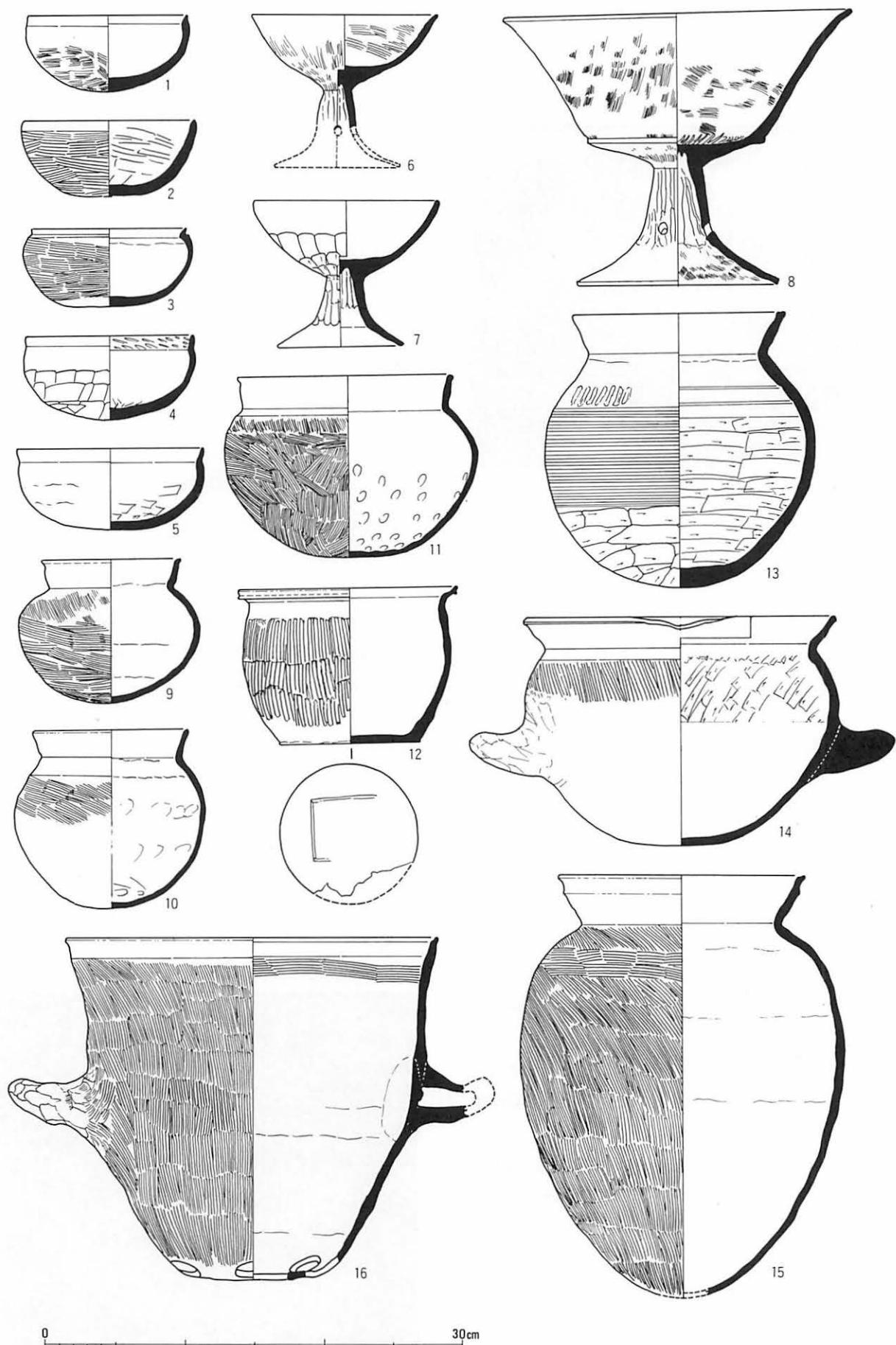


図8 古墳時代斜行溝S口3100出土土器 その1 1:4 土師器 韓式土器

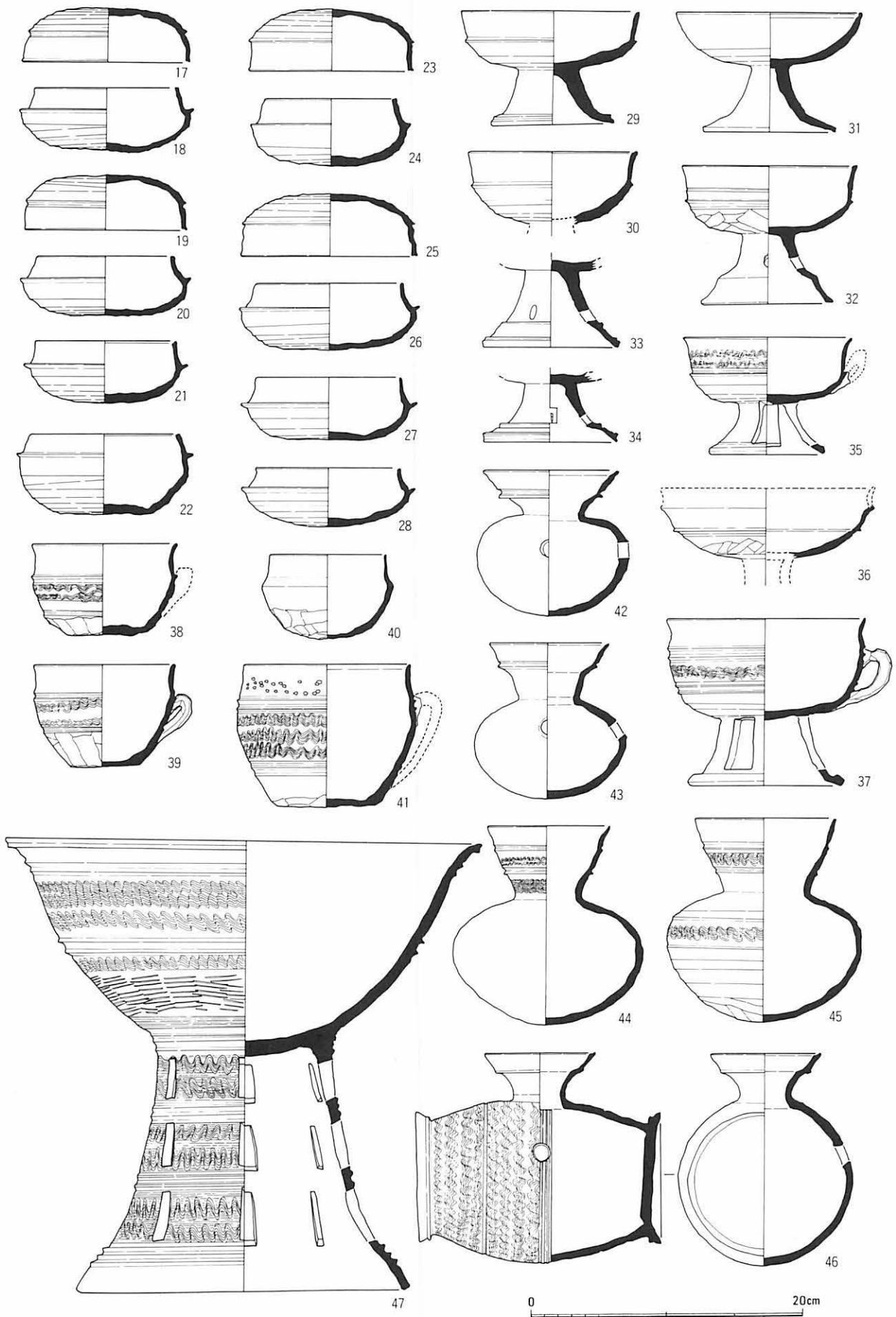


図9 古墳時代斜行溝S-3100出土土器 その2 1:4 須恵器

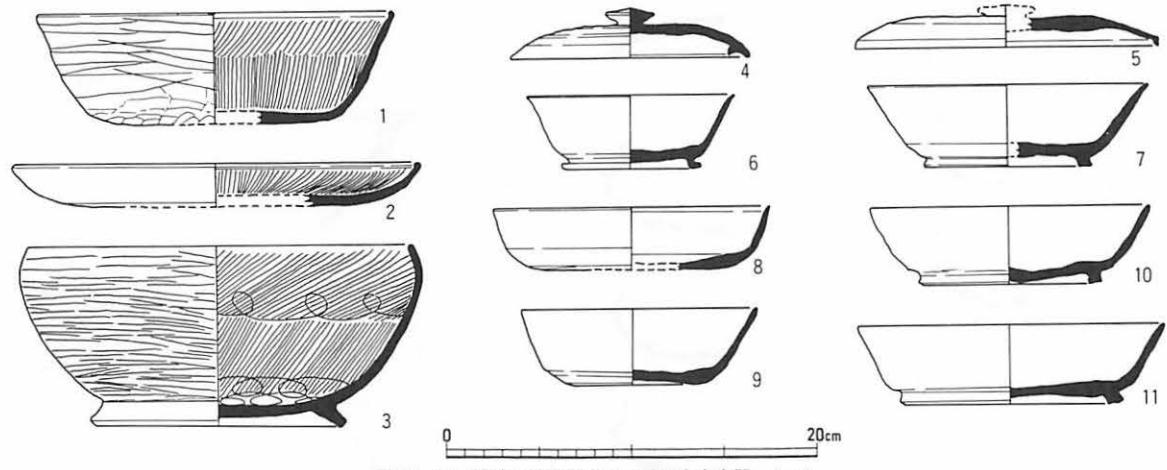


図10 西二坊坊間路東側溝SD3206出土土器 1:4

よどんだような状況である。多量の古墳時代土師器、須恵器、韓式土器が出土した。土器は南岸寄りに集中して出土する傾向がある。出土土器には、完形品または完形に近い大破片のものが多。磨滅の痕跡もほとんどみられず、ごく近い場所から投棄されたものと推定できる。第1層は、厚さ5cm前後、溝の南岸に幅1~1.2mで、溝埋没の最終段階のオーバーフローとみられる。北半部は後の削平が深く及んでいるため、第2層が直接露出しており、第1層の本来の幅は不明である。堆積層は赤褐色の粗砂に礫をまじえ、多量の古墳時代土器を含むが、それらには、磨滅した細片が多い。

斜行溝SD8760 調査区南端で検出した南東から西北へ流れる溝である。幅は約1~1.4mで、深さは0.4m、長さ26m分を検出した。溝は、ほぼ直線をなし、調査区の西端および東寄りでわずかに南へ湾曲する。基本的には素掘りであり、北岸東寄りには、長さ2mにわたって、しがらみ護岸の痕跡と見られる杭と杭跡計4箇所がある。堆積層は、灰褐色砂質土を主体にし、古墳時代の土師器、須恵器、韓式土器が出土した。

4 出土遺物

主な出土遺物には木簡、土器、瓦、木製品、金属製品、石製品がある。

木簡 西二坊坊間路東側溝SD3206から1点出土した。篆文、法量は次のとおり。

[知夫利カ]
□□□評由羅五十戸

加□□加伊□□ □ 192×33×4mm 031型式
[鮓カ]

上半右側を欠くが完形に近い。切り込みをもつ荷札木簡で、貢進地はのちの隱岐国智夫郡由良郷（和名抄の表記）にあたる。「評」「五十戸」の表記からみて7世紀末の木簡である。

土器 弥生時代、古墳時代と藤原宮期前後の土器がある。弥生土器は下層包含層に伴うもので弥生時代後期が主体を占める。古墳時代土器は主に2条の斜行溝から出土した古い段階の須恵器をともなうものが多量にあり、須恵器をともなわない古式土師器が少量ある。藤原宮期前後の土器は、西二坊坊間路の東側溝SD3206および土坑SK8745等から出土したものにまとまりがある。土器の大半は整理途上にあり、ここでは、斜行溝SD3100と、東側溝SD3206出土土器をとりあげる。

SD3100出土土器（図8・9） 下流の第33次調査、上流の第76・80次調査でも多量に出土し、南方の第62次調査地、香久山西麓の第46次調査地の住居跡出土の土師器・韓式土器等や明日香村山田道第2次調査地、橿原市四条大田中遺跡、南山古墳群出土の土器群などとともに、古墳時代中期における飛鳥地域の様相をさぐる上で重要な資料である。

ここでは、主に第2層出土の須恵器、韓式土器を抽出して示した。したがって、器種構成を反映していない。

土師器には、椀（1~5）、高杯（6・7）、甕（9~11）、鍋（14）、長胴甕（15）、瓶（16）などがある。椀には調整法や口縁部の形状の異なる多様なものがある。高杯には、半球形の杯部外面をハケメ調整する小型品（6・7）と口縁が大きく外反する大型品（8）がある。小型品には対向する2個の円孔をうがつものと円孔のな

いものがある。甕には球形かやや縦長の体部のものと広口で浅いもの(11)がある。細かい白色砂粒が多量に混じる胎土が特徴的で、椀(1・3)や韓式土器の影響をうけた長胴甕(15)、甌(16)にも共通している。鍋(14)は、片口で棒状の把手を貼り付ける。内面上半を強くナデあげる。長胴甕(15)は、口縁部上半に強いヨコナデによる段がある。体部外面は細かなハケメ、内面はナデ調整。粘土紐の継ぎ目が残る。甌(16)は、下すばまりの体部中央に棒状の把手を付ける。把手は中空になっているが、内部から挿入した芯が脱落した可能性がある。底部には中央の円孔を囲んで5つの小円孔をあける。

韓式土器には軟質の平底鉢(12)、甌(13)、甌、硬質の平行叩き甕などがある。12は外面を平行叩きで調整し、底部に方形のゲタ痕がある。13は器形が土師器甕と類似するが、厚手で体部外面に平行叩きとカキメ状の条痕がある。二次加熱を受けている。甕にはほかに薄手で外面に平行叩き、内面に同心円当て板痕跡が残るものがある。甌には平底で外面を格子叩きで調整したものがある。

須恵器には杯(17~28)、高杯(29~37)、椀(38~41)、甌(42・43)、壺(44・45)、樽形甌(46)、器台(47)などがある。陶邑編年のTK73~TK216に属する古い段階のものが主体をしめる。多様な高杯、把手付椀など韓式系の硬質土器と区別しがたいものがある。

SD3206出土土器(図10) 「評」の木簡と伴出した点で重要な。器種には土師器杯A(1)、杯C、皿A(2)、鉢B(3)、甕、須恵器杯B(6・7・10・11)、同蓋(4・5)、杯A(8・9)、壺、甕がある。1は口径18.6cm、高さ5.8cm。2は口径21.1cm、高さ2.3cm。ともに口縁端部が小さく内側に肥厚する。3は口径20.3cm、高さ9.7cm。2段の放射暗文の境にラセン文を施す。須恵器杯B蓋では身受けのかえりのある4に似たものが多く、かえりのない5のようなものはわずかである。杯BIII(6)は高台の端部が外方へ突き出る。杯B(7・10・11)の高台も外方へ踏ん張り気味で藤原宮造営直前期の特徴を示している。8は内外面に火櫻があり、底部はロクロケズリ。9は底部ヘラキリで内面に自然釉がかぶる。

瓦 丸瓦が23点(2.33kg)、平瓦107点(10.78kg)が出土した。SK8741出土分以外は、ほとんどが小片で出土し、軒瓦は皆無であった。

木製品 SD3206出土の曲物底板などがある。

石製品 石包丁、石斧、紡錘車などがある。石包丁は、弥生時代の包含層(黒灰色土)から出土したものである。石斧は小型の柱状片刃石斧で、SK8761から出土したが、ベースをなす弥生時代包含層から遊離したものであろう。紡錘車は、古墳時代溝SD8760から出土した滑石製の截頭円錐形のものである。

5まとめ

今回の調査では、予想位置に先行条坊道路(西二坊坊間路、五条大路)とその側溝を検出した。

西二坊坊間路については、その東側溝は、今回検出した約54m分のうち、北寄り約10m分が深くなっている。西側溝より東側溝が深く掘られていることは北接する第54-9次調査区での知見と同様で、側溝のどちらか一方が深いことはしばしばみられる現象である。

北の既調査区(第5~9次)では、先行条坊側溝を埋めて官衙が造営されているが、本調査区でも先行条坊側溝は埋められているとみてよい。

五条大路については、西面南門から東に向かう宮内道路として踏襲されたとかんがえられているが、今回の調査区内では、五条大路が藤原宮期に踏襲されたことは確認できなかった。

本調査区は、藤原宮西方官衙南地区の西南隅部に近く、東の既調査区で発見されているような区画の存在が予想された。しかし、今回の調査区で検出できたのは、小規模な堀や、土坑のみであり、建物はまったく検出されていない。ここが、西面南門を入って、すぐの場所であることから、広い空閑地となったのか、あるいは既に削平をうけて建物などの遺構が失われたのか、現状では決し

がたい。

今回の調査区では、このほか古墳時代の水田と溝を検出した。水田は4世紀代、斜行溝SD3100と、SD8760は5世紀代と推定する。水田の遺構は、これまで、本調査区をふくむ四分遺跡では、弥生後期の水田(第59次調査、第66-15次、68次西)が多く知られているが、古墳時代の水田としては第71-2次調査に次ぐ2例目である。集落の北辺に近いとおもわれるこの地域の古墳時代における土地利用の状況を示す好資料を得たことも特筆されよう。

(千田剛道/考古第2 土器:西口)